30P1-am120

『呉晋本草』の薬物について。

○塩原　仁子[1], 真下　順一[1]([1]昭和大薬)

秦・漢時代以来、薬学の領域では薬物・薬品が絶えず増加し、薬物の性能と作用に対する知識が豊富になっていった。それと共に中国に現存する最古の薬物学である『神農本草経』以外にも、『桐君採薬録』『李氏薬録』『呉晋本草』等の薬物学についての専門書が著された。そのうち『呉普本草』は、華佗の弟子の呉普の著作で、全６巻、薬物の範囲は４４１種に及ぶ。『呉普本草』の書名が最初に現われたのは、梁代の元孝緒著書の『七録』、陶弘景著書の『本草経集注』である。中国医学史上、作者の明らかな本草学書の一つである。呉晋は広陵出身で「普く佗療に依準し、全済する所多し」と言われた名医家で、気功法「五禽戯」により身体を鍛錬、「年９０余にして耳目聡明、歯牙完堅たり」という矍鑠ぶりであったといわれている。呉晋は師華佗の継承者で、学術思想は殆どが師華佗より直伝されたものであった。『呉晋本草』の成立は、２３９年前後の説がある。北宋時代に失伝散佚した。内容の大部分は、唐宗時代の薬物書・医学書の中に残存する。『太平御覧』には最も多くの引用があり、『呉普本草』から転載された薬物は、１９１種に及ぶ。『呉普本草』は、『神農本草経』の薬物名称・性味・効能・別名・産地などの内容を援用、薬物の生態・採集時期方法・炮製加工法・適応症・禁忌症などについての詳しい内容も加えている。薬物１種に、必ず一つ以上の別名を掲げている。例えば、薯蕷には、秦・越・斉・楚・鄭・趙の６つの国での、それぞれ異なる呼び名を紹介しているほどである。薬名の統一・確定を促進する上でも有益なことである。『呉普本草』が後世の薬物学に与えた影響は大きく、深いものがある。